

拠点大学の概要及び採択理由

機 関 名 大 阪 大 学

[国際化拠点の構想の概要]

1) 英語による授業のみで学位を取得できるコースの設置

①**人間科学コース**を人間科学部に設置する(学士号授与:定員10名):本コースは激変する現代社会及び世界に貢献できる人材養成を目指すもので、人間と社会に関する諸科学の幅広い知識を習得できるカリキュラムを提供し、**実践的な問題解決力を備えた高度教養人の育成**に取り組む。実験やフィールドワークを含む少数精鋭のエリート・コースとする。

②**化学・生物ダブルメジャーコース**を理学部・工学部・基礎工学部共同で設置する(学士号授与:定員20名)。本コースは**化学と生物の融合分野で国際的に活躍できる人材養成**を目指す。**GCOE(生命環境化学グローバル教育研究拠点)**が中心となり、化学・生物分野について必要な専門基礎知識を全て取得できるように編成されたカリキュラムを提供し、今後の分野横断型研究・開発の第一線に立つ能力の養成に注力する。

③**国際物理特別コース**を大学院理学研究科に設置する(定員10名)。本コースは特殊装置を駆使する**大規模科学研究者が中心**となり、**国際共同研究や国際共同利用施設にて指導力を発揮しながら活躍できる人材養成**を目指す。高度基礎教育を重視した授業科目を提供する。特に他大学にはない高度な装置を実際に使用する学生実験を提供し、先端の実験遂行能力を養成する。

④**統合理学特別コース**を大学院理学研究科に設置する(定員10名)。本コースは広い学問的視野を持ち、**化学と生物の融合分野において国際的にトップレベルで活躍できる人材養成**を目指す。**大学院GP(インテグレート大学院理学教育)関係者が中心**となり、高度基礎教育から先端的トピックスまでの充実した授業科目を提供する。特に先端研究に近い高度な技術取得を目指す学生実験を提供し、真の実力養成に注力する。

いずれのコースにおいても留学生センター及び日本語日本文化教育センターが協力し日本語・日本文化教育を実施するとともに、日本における就職機会向上を図る。各コース全科目の詳しいシラバスを用意し、授業内容の透明化を図る。欧州ECTSの考え方に則り、学生の学修過程を厳格に管理し、それに基づく成績管理・評価、修了判定を行う。特に学部コースについては、基礎科目に関するテキストを全世界から収集厳選し、それにより学習内容の明確化を図る。また、GCOE等の研究活動を通して優秀な外国人教員を多数雇用し、新規英語コースの授業を日本人教員と連携して担当させる。

「**大阪大学インターナショナルカレッジ**」機構を創設し、コース関連教員を構成員とする機構会議を編成するとともに、アドミッション・学生管理・教務を専任で行う教職員を配置し、英語コース開設のノウハウの開発と効率的運営に取り組む。同機構に既設コースも加え、さらに将来新たな英語コースの追加へも、障壁を除去し迅速に対応できる体制を創出する。

2) 留学生受入れのための環境整備

①「国際教育交流研究センター」の設置

現留学生センターを発展的に改組し、国際教育交流に関する研究をも併せて行う「国際教育交流研究センター」とする。企画室を置くほか、チーム制を導入し、**短プロ開発研究、日本語教育研究、交流・アドバイジング**研究それぞれのチームを設ける。必要に応じて各チーム間で相互支援を可能とする。留学生増加に対応できるよう日本語教育、交流・生活指導、アドバイス等の活動強化とともに、**全学的短期受入・派遣プログラムの企画並びに部局プログラムの企画・推進・支援**に重点的に取り組み、**全学で毎年数十名以上の受入れ増**を図れるよう新規プログラムの開発を目指す。

②「**サポートオフィス**」を拡充・強化:既設のサポートオフィスを国際教育交流研究センター併設とし、職員に加えて教員を配置し、留学生の飛躍的増加に対応できるよう、その機能、すなわち**ビザ取得業務支援、宿舍の斡旋、留学生のケア、キャリア形成(就職)支援等の拡充・強化**に取り組む。

③上海教育研究センターの新設並びに既設海外拠点の海外大学共同利用事務所化

既設のサンフランシスコ教育研究センター(管轄:北米地域)、グローニンゲン教育研究センター(欧州諸国)、バンコク教育研究センター(タイ・ベトナムを始めとする東南アジア諸国)並びに平成21年10月をめどに設置予定の上海教育研究センター(中国)により、留学生リクルート活動を推進する。英語コースの学生だけでなく、短期留学等大阪大学が提供するあらゆる外国人学生対象教育プログラムのプロモーションを行う。アドバンスド・プレイズメント等の導入検討、「日本留学試験」等の活用、遠隔会議システムによる面談等を実施し、渡日前アドミッションへの支援体制をとる。

併せて、**サンフランシスコ拠点並びにグローニンゲン拠点を海外大学共同利用事務所化**し、日本の大学全体の留学生受入れ促進に向けた情報発信やワンストップサービス業務の支援に当たることを構想する。

3) 達成目標

①**英語コース**、②**短期受入プログラム**による留学生受入れに加え、③**海外におけるリクルート活動及び学内の国際化推進活動へ積極的に取り組む**ことにより既存カリキュラムへの学部正規留学生を全学で毎年10名の増加を見込む。④**GCOE等の国際拠点活動とも強力に連携し、特に学部短期留学生受入プログラムの魅力度を高める**ことにより、同短プロ参加者の3%が再度大阪大学の大学院に入学することを見込む。以上により、**平成20年度に1,385名であった留学生数を、平成22年度末で約1,500名、平成25年度末で約2,000名、平成32年度末で3,000名を達成することを目標**とする。

外国人教員に関しては本事業による新規雇用を含め**平成32年度で7%**を目標とする。

4) 国際化拠点の運営体制

本部役員の下に置かれた**国際交流室のもとに運営委員会を組織**し国際化拠点整備事業の実施に当たる。留学生受入れで世界的に実績のある**海外の大学の外国人外部委員を含む評価委員会を設置**し、取組の進展状況についての評価・助言を得る。

国際化拠点の概念図(海外における留学を促進するための取組、国内における留学生の受入のための取組について、構想の達成目標と取組計画をわかりやすく図示してください。)

国際化拠点概念図

米国

EU諸国

タイ・ベトナム

中国

大阪大学海外教育研究センター

ミッション

- プログラムプロモーション
- 渡日前アドミッション支援
- グローバルネットワーク構築

サンフランシスコ
センター【既設】

グローニンゲン
センター【既設】

バンコクセンター
【既設】

上海センター
【新設】

海外大学共同利用事務所化

英語で学位を取得できるコースの新設

インターナショナルカレッジ機構

【新設】

学部

- ◆人間科学コース
(人間科学部; 10) (高度教養・実践力養成)
- ◆化学・生物ダブルメジャーコース
(理学部・工学部・基礎工学部; 20) (分野横断型基礎学力養成)

大学院

- ◆国際物理特別コース
(理学研究科; 10) (大規模科学研究遂行力養成)
- ◆統合理学特別コース
(理学研究科; 10) (化学・生物融合分野研究力養成)

【既存】

- ◆フロンティアバイオテクノロジー英語特別コース
- ◆エンジニアリングサイエンス英語特別コース
- ◆船舶海洋工学英語特別コース
- ◆量子エンジニアリングデザイン研究特別プログラム

+

機構会議・事務局・専任教員
アドミッション・教務・学生管理

短期留学受入プログラム

短期留学派遣プログラム

受入環境の整備

国際教育交流研究センター

- ◆企画室
- ◆短プロ開発研究チーム
- ◆日本語教育研究チーム
- ◆交流アドバイザー研究チーム
- ◆サポートオフィス

- ビザ取得支援 □宿舎斡旋
- 留学生ケア □キャリア形成(就職)支援

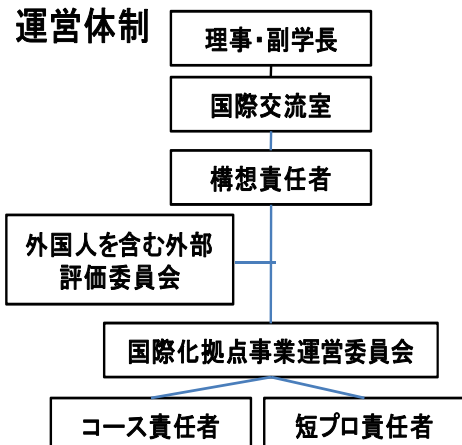
留学生センターを改組・拡充

プログラム開発・支援

学部・大学院・研究センター等
既設カリキュラム

日本語日本文化教育センター

運営体制



英語コース

- ◆学部新設: 30名
- ◆大学院新設: 20名

◆大学院既設: 26名
平成32年 約300名増

短期留学受入プログラム

OUSSEP/MAPLE
FrontierLab@OsakaU
Erasmus Mundus

順次開発・提供
約800名増

留学生数: 1385(H20)→1500(H22)
→2000(H25)→3000(H32)

外国人教員: 7%(H32)

約1600人増 3000人達成

学部生入学者増

約300名増

短プロ参加者の
大学院への再入学

約200名増

大 学 名	大阪大学
-------	------

〔採択理由〕

大阪大学の国際化に関し、既に英語による授業のみで学位が取得できるコースや短期留学プログラムの実施、種々の国際交流活動等の実績があり、今後の留学生の受入の更なる充実が期待できる。また、国際化拠点の整備のための構想は、大学が国際的な評価を得ている分野を中心とした英語による授業のみで学位が取得できるコースの開設や、留学生センターの発展的改組などの取組は高く評価でき、我が国を代表する国際化拠点の一つとしての成果と今後の展開が大いに期待できる。

<特に優れた点、期待できる点、留意すべき点>

- ・国際化拠点として、生物、物理など、大学が国際的な評価を得ている分野を中心に、これまでの高い研究実績を活用した取組を計画している。
- ・各部局を中心に進められている国際化の取組について、学長のリーダーシップによる全学的な戦略形成に向けての一層の努力が望まれる。